HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学水産科学研究科・水産学部(2)
Citation	高等継続教育研究, 3, 103-112
Issue Date	2004-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51894
Type	bulletin (other)
File Information	Hokudaisuisa2-3-14.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

2.　北海道大学水産科学研究科・水産学部(2)

日　時　　2003年8月7日　15：00～16：30
話し手　　廣吉　勝治 氏（北海道大学水産科学研究科教授）
　　宮澤　晴彦 氏（北海道大学水産科学研究科助教授）
聞き手　　姉崎・光本・石山・伊藤・上田敦・上田理・金澤・川瀬・佐々木・染木・滝ヶ平・星

学部の生い立ちと地域社会とのかかわり

廣吉　僕たち自身も漁業経済・水産経済の分野ですから、トータルな仕事をしているわけではないので、その限りでの、学校の産業的なポジションとかその周辺での話になります。全体を代表する意見ではありません。われわれみたいなのは農学部の農業経済とは違って学科構成もとっていません。昔の講座が一つあるだけです。それぞれの意見をうかがった方がいいのかもしれないと思います。

基本的にはここは実学を中心とした大学として長い間続いてきました。それでも、基礎学の理科系といってもいろいろありますから、生物・化学・物理、それぞれかかわりが違うと思います。学科編成もうまい具合にそういうかたちで、旧学科目でいえば大体分かれています。

100年の中で変わらずにきたものとして、生物の中でも増養殖系と製造学、食品、微生物と漁業、それから資源学と物理工学系のものは大体変わらず、出発点三つの構成みたいなものもしっぽを残しながらきています。

いま旧漁業系が分かれて、水産海洋学科と海洋生産システム学科になっています。これは、いわゆる海洋物理の連中が中心になって動いています。われわれがいるのは海洋生産システム水産学科、旧漁業系が強く残るところです。それぞれ現場とのかかわり方の深さも違うし、フィールドも違う。産業経済の分野ですから、水産業・漁業の存在とかかわって、飯のタネにしている分野です。農業なら農業経済にあたる分野です。

もともとは函館高等水産学校だったので、帯畜と同じように、そこの地域にかかわるようなものはあったと思いますけれど、高等水産というのは全国にうちしかなかったんです。高等農業はたくさんありました。戦前は、盛岡・宇都宮・鳥取・宮崎などにありました。しかし、水産の専門学校はここにしかなかった。そういう要因があるので、当初から、函館は函館なんですが、全国区的な学校で、入口出口論でいっても、地域のかかわりでいっても、やっぱりグローバルな内容をもたざるをえなかったと思いますよね。いまでも学生の出身地は全国にわたっています。

宮澤　晴彦 氏（中央）・廣吉　勝治 氏（右）

戦後はわれわれ水産伝習所・講習所系譜の東京水産大学ができて、当初は同じような状況だったと思いますが、いまはどうかな。東水大は商船大と合併して海洋大になるらしいですが、私がそこにいたときに感じたのは、東水大は“東京の学校”ですよね、入口論からすれば。つまり、首都圏出身の学生の構成が6割7割です。ずいぶん変わってしまっています。首都圏の学校はみなそういう側面をもっていますよね。東大とか一部の学校は別ですが、でも、大体東京の学校はそうですよね。

僕自身は、最初、民間の会社にいました。そして、農林省の水産大学校、下関にあるいまは独立行政法人になっているところに10年いました。東京水産大に約10年、そしてこちらです。同じ実学をベースにした学校を渡り歩いて、それぞれに違う。それを興味をもって、突き放して見ています。

昔の入口出口論でいえば、それはすでにないんです。水産関係にどれくらい就職しているのかとか、社会にどれくらい貢献しているのかとか。水産業自身が、国内の産業的な配置ではどんどん産業序列が

変わっていて低下させられてきていますから、そうまくいかないです。地球レベルではこの産業はそうでもないんですけれども、部分的には関係業界への就職はあることはありますが、国内では就職の機会としての対象ではなくなっている。よくいわれるんですけれども、農学部の方がもっとひどいじゃないか、と思います(笑)。農家にならなくてもいいが、もう少し日本の農業に貢献するような就職先が評価基準じゃないのかって、僕らなんか言い返したいですね。水産のことをいわれるんだったら。学問は別ですけれどね。70 年代くらいになってくると、地域とのかかわりも変わってきた。再編されてきたんです。

一昨年、藤田正一副学長が演説に来ました。函館はいいんじゃないか、魚もうまいし、空気も。なかなかいいと（笑)。あんたがたまに来て一杯飲んでいくにはいいが、われわれが研究するのにはどうか。実は札幌に毎日のように 1 泊 2 日で授業に行ったりしているんだけども。そういう状況じゃないわけです（笑)。

つながりでいえば、函館というつながりではありません。北海道にあるから、函館というよりは道内・業界関連産業分野とつながりをもっています。それは昔もいまも変わりません。函館にあるから函館という、そういうものじゃないわけです。函館への貢献度の高さというのは、地元の理事者から見るとそういいたいと思います。われわれから見ると、全道の水産関連事業との接点だとか、様々な社会との接点とか、函館を越えたものです。早くからそうなっていました。

教授会資料などをご覧になればすぐに分かると思います。受託研究、共同研究、それから教官が併任・兼業、函館関連のものは少ないです。

姉崎　全国型の企業からもらっている場合と、道内型の企業からもらっている場合とかなり差が理系でもあります。ここは、全国型・道内型どちらですか。

廣吉　道内が多いと思いますが、函館関連は少ないです。最近、未来大をつくって、道南学術基金をつくって、周りの自治体から出させてファンデーションをつくりました。

事業所レベルでいいますと、函館は、70 年代以降、日露漁業みたいな大手の水産会社が撤収して、いま出張所みたいな営業所が残っているくらいで、また函館どっくももちろん船台はまだ残っていますけれど、2 度も 3 度も倒産の危機に会い、メインの事業所が大きく様変わりしています。

いまや売上高トップは全然違います。「魚長」さんというローカルスーパー、あるいは「函館魚市」という地方卸売市場の卸売業者あたりです。それからジャックスというのは函館なんです。ジャックスカードのジャックスです。函館が本部といっています。

ところで、市内で雇用規模が一番大きな事業所はどこか分かりますか。

姉崎　イカの加工ですか？

廣吉　いいえ、市役所です。4000 人くらいですね。私は 6 年前まで神奈川に住んでいまして、よく川崎市の仕事をしています。川崎は人口 113 万人くらいいます。現業を入れて職員 8000 人くらい。函館は環境部など現業が公務員ということです。

産業構造の変動と水産業の位置

宮澤　水産学部というのは、当然、水産学をやっているわけですが、水産の流れでいえば、1970 年代の後半までは上り調子で受け継がれてきたわけですね。特に北海道の北洋漁業は日本の漁業全体でいっても花形だった。しかもここが玄関口で、北洋の出港の資材もここで積んで、船団もここに終結して、人も金もここを中心に動くという状況がありました。水産学部でもその流れがあって、一定程度産業的な色彩の強い大学として機能して、地域的にも、その当時から先生のいわれるような全国的な要素があって、遠くは九州・沖縄あたりから来る学生もけっこういるという状況の中で、産業的な連関があって、研究内容や授業の内容も含めてもっていた、そういう時代があったわけです。

ところが、米ソが 200 海里体制をとるのは 1977 年です。それ以降、北洋の縮小がはじまるのですが、本格的にはじまるのが 1986 年以降です。それはソ連とのアメリカとの関係でも詳しくはいろいろありますが、割り当て量が急に減る、減船を強いられる、そういう第二次 200 海里ショックという時期を経て、日本の水産業全体が地盤沈下、再編成を迫られる。そういう流れがあって、函館の産業構造も変わってきた。

水産学はごく一般的にいうと、捕る漁業、育てる増養殖業、それを製品化する食品加工業・製造業がある。学科目の編成の基礎も漁業と増殖と製造学がある。プラスしてここには水産化学があり、製造を補強するというよりは、自立的な海洋学に近いような分野を受けもっていた。しかし、基本は漁業・養

殖・製造に対応するようなかたちがとられていました。

問題は、産業の構造変革がそれに合わせて守備範囲を広げてそれに対応してきたというよりは、実学としての基礎を変化させながら強化したというよりは、産業の実学的要素から基礎学の方に流れていく傾向があります。そして、産業の衰退の中で、衰退といっても日本人が魚を食べなくなったわけではないのですが、そんな中で内容が再編されたというよりは、むしろそこから離れていく傾向が出てきた。それが、この何年かの間に出てきた印象を持ちます。

函館市の都市計画

宮澤　そういう点では、海洋創成研究機関というものをつくったのも、水産何とかというのではなくて、今回市長がナポリへ行っているのもそうですが、「地球海洋科学」みたいな、そういう海洋研究のフロンティアみたいなものの拠点にしようというイメージが非常に強いわけです。地元の産業貢献というよりは、どちらかというと研究都市的な構想になっている。そんなふうに動いてきているという印象をもっています。

その評価ですが、一応、画を描いたけれども、具体的な中身を入れるのはこれからだと聞いています。はっきりいって水産学研究科が水産科学研究科と名前が変わったように、サイエンス志向は、それをやるのは理学部でもできるのです。アイデンティティを保つとか、地域の地場産業的なものに貢献していくとか。そういった地に足のついたかたちになりうるかどうかというのは、僕自身は疑問に思っています。果たしてそういう方向が世界の海洋創成研究の拠点たるものになるかというと、アメリカのウッズホールとか、イタリアではナポリですか、そういうレベルのものになるかというと、それは画餅に等しいのではないかというのが個人的な感想です。

廣吉　函館の産業の中心は観光です。明らかに函館市が意識しているのは観光を中核にして水に関係あるものとか、海や魚に関係あるものに広げて、活性化できないかとかいう話です。観光だけは元気なんでしょうね。

宮澤　ダンピング競争ですね。そちらはそちらでね。

姉崎　素朴な疑問で、同じような人口で旭川が元気がないですね。釧路へ行っても同じような感じで、厳しいという中で、ここも状況的・構造的には同じように厳しいけれども、自治体として未来大に一定お金を出したりとか、かなり人数を派遣したりとか。実は明日行くのですが、ロシアのウラジオストクの極東大学の 40 人しか学生がいないんですが、自治体としてどうしてそんなお金が出せるのだろうかと考えると、観光などある種のお金が入る要素があって、それが多少上向きというか強気ということなのじゃないかと思うのですけれども。

廣吉　明らかにそうです。函館の事業収入は、どこもそうでしょうが 3 割切っているかもしれません。自立できるような財政収入、その多くは観光関係だと思います。イカもありますけれどね、イカよりも観光の方が伸び率がよい。だからそちらの事業者の意図をうけた行政を行わざるをえない。

宮澤　イカ・珍味業界は非常に厳しいのではないですか。

廣吉　厳しいけれど、イカしかないですからね。製造業は。後は観光産業と観光産業関連ですね。お土産屋さんと商業を含めて。だからそちらの経営者の力が強くなってきたということです。

あと、宮澤さんがさっきいったことですが、水産イコール北海道の産業です。いまでもウエイト的にはまだ落ちてはいません。北海道は日本の水産業の基地、産地としての存在感は大きくて、2 番手以下の都府県の追随を許さないダントツのウエイトがあります。そういうことは、ここの学部がそれなりに際立ったということと対応していたと思います。

資格者養成の問題

姉崎　去年うかがった酪農大は建学の理念が明確で、創設者も個性的な黒澤酉蔵で、酪農学科をベースにして、三愛運動という、大学拡張運動としてはかなり面白い展開を地域の農家とやったりして、かなり個性的な大学だったのですが、学部学科を増やしてきて、普通の大学になってきて、研究業績はあがってくるのですが、初期理念がほとんど消えていくということが起きてきて、それをどう現代的に再生するかという問題があるようです。つまり、実学とつながってできてきた大学が、より研究志向を強めてリサーチを中心にして、そういう意味では大学らしくなってくるのですが、それと同時に普通の大学になってしまう。そういう危機感があるとおっしゃっていました。

廣吉　それは、うちも同じです。実学のトレーニングセンターとしての高度職業人養成みたいなところは空洞化していくという、同じような事情はあると

思います。

ここも 1 級海技士免許の資格者養成機能をもっていました。運輸省の認定校ではなかったですけれどもね。ずっと長いこと、東京水産大学と同じように、大型船、遠洋の区域の演習に使う船を 2 隻もっていました。いわゆる資格者養成部門の学科がつくられていた時期もありました。遠洋漁業学科です。それが平成 10 年に資格養成の教育部門を返上してしまうのですが、資格者養成という点は明確でした。

しかし、資格者養成というのは、よく見たら、一流の水産会社の社船の幹部の乗組員を養成しただけではないか、本当に必要なカツオマグロ漁業とか、巻網とか、沖合い底引きの幹部船員になったり、そこのリーダーとして役割を果たして行くというところにここの出口はあったかというと、そこはあやしいです。

佐々木　そこが切れても大学は学問としての水産学を追求する道があるわけですが、実業学校の水産科の高等学校は資格機関ですから、そこから脱皮することができないわけですね。出口がないのが分かっていても、大型実習船 660 トンの青森県の「青森丸」というのが 3 月末に就航したようですが、まだいまでも大型の船舶を 16 億 4000 万円かけて新造することしかできない現状があります。北大みたいな、水産科教員を養成するような課程をもっているところは限定されているでしょうが、水産高校にどのような教員を養成することで元気を与えるかというと、ものすごく抽象的ですが、そういうことですよね。そういう点で北大水産学部がこれから役割を果たしていくのかなと思います。

廣吉　うちの練習船が、資格者養成の機関、産業その資格者を育てる施設だったかというと、よく考えてみるとあやしいんです。国際トン数で 3000 トンの練習船は漁船にはないんです。一番必要なのは 500 トン未満の漁船であったりするわけです。飯を食べる場所でも、部員が飯を食べる場所、学生が食べる食堂、そして幹部船員が食事をする所、食堂がなぜ三つも必要なのでしょうかね。大会社の社船ではそうかもしれませんが。

佐々木　青森丸も船長室はすごいんですよね。そして船長室の横に作戦会議室みたいな立派な会議室がある。金のメッキを施したような。そんな豪華客船ですね。

廣吉　東京水産大学の海鷹丸は、あそこに全部漁業関係の水産関係の訓練施設を集約したかっこうになっている立派な船です。

宮澤　6 階建てか 7 階建てですね。

廣吉　学生を指導するときも、僕は問題あると思いますが、世界一周できますよ、タダで、とか。海鷹は長期航海で世界一周するんです。女性の人気もあって、女性の将来クルーとなる人のことも考えて、女性専用の部屋も確保する。もちろん女性専用の施設を備えるとかいろいろやって、それは立派なのですが、漁業練習船の船員養成という目的から見てどうでしょうか。

宮澤　戯画的ですけれども状況を象徴している部分はありますね。漁業実習をするよりは、パーティーボートなんかではやっている実習をした方がいい感じですね。

実学とのかかわりと学問・学部のアイデンティティ

廣吉　現実的な産業構造の変化に対応なしの再構成、それは結局アイデンティティを失う道ではないかという説明をしたつもりです。中身が漁業・増殖・加工というような、そのかたちが変わりながらいろいろと水産業の実態が変化してきている。それに対応し切れないから、学問の側がアメーバのように変身しながら対応する。水産高校もいろいろ工夫をして名前を変えたりなどしている。

われわれは、何にどう対応するべきかという議論をしなければいけないわけです。例えば、水産物の消費量が減っているのではなくて、食べる量は最近不況の影響で若干減っていますが、日本は世界のトップ水準の水産物の消費国、世界最大の水産物輸入国です。世界の水産物の総輸入額の 25%くらいですか、日本が買い占めている。それだけ巨大なマーケットを形成している中で求められているものは多様にあると思います。地域の社会の中で求められている要素がたくさんあると思います。産業にフィットしないで、海一般、学問一般に解消しちゃう方向が強まっているわけです。変化の中で議論しなければならない。

宮澤　もう一ついえるのは、産業の変化の現状をきちんと踏まえた議論をしてこなかったというのが私の印象です。僕は 1 年ちょっと前にこちらへ移ってきたんですが、例えば、本学に移りたい、札幌へ移転したいんだと、函館ではなくて、札幌の方が情報も速いし、利便性があって、学生もわざわざ島流しに 1 年半札幌にいていい思いをしていたのに、サークルもクラブも慣れて、本当はみんな移りたくない

わけです、面倒臭くて。面倒臭いというよりも、こちらにきたら寂しい。北大の中ではつまはじきになったような感じです。

廣吉　学習条件がだんだん悪くなってきています。

宮澤　それで移ろうというのはいいんです。学生の教育とかいろんな利便性を考えて、これはいい。アイデンティティを保ったかたちで向こうに吸収されずに位置を確保するには何が必要かという議論を、産業実態だとかを踏まえてきちんとしたのかということを感じて、移転計画というのを聞きました。構成員の中で検討をきちんとオープンにして、いわば総力をあげて、荒波の中で生き残っていくかという根本的なことをやっていこうというような、民主主義といいますか。全力投球でやっていこうということを私はイマイチ感じない。ここに限らず多かれ少なかれ大学の根源の問題なのかもしれませんが、ますます法人化されてトップダウンになるとそういう傾向が強まるのかもしれません。それは道をうまく適応できない元凶ではないかという気がします。トップが間違わなければいいですよ。でもそれはあやしいなと率直に思います。

廣吉　ここの教官には、水産業・水産学の認識論において相当隔たりがある感じがします。農学部も同じだと思います。

僕は産業経済の仕事をやっていて、水産業が衰退産業だと全然思っていないんです。最近農業や水産業における多面的機能論という WTO がらみで、研究がけっこう盛んなのです。マルチファンクショナリティーという概念なんです。つまり、地球環境の議論しているときに、農業・林業・水産業の価値は物をつくって食うというレベルのものだけで評価できないという議論です。

水産業も遅ればせながら基本法ができて、そんな議論も一般的にするようになってきています。試験研究で最近、水産業という概念をひろげて考えたら、200 万人くらいそこで就業しているという結果が得られているんです。例えば、魚屋さんがなくなれば失われる商売が相当なものとなってしまいます。水産業があってはじめて成立している関連産業というのは非常にすそのが広くて、かつてよりは産業連関効果が非常に高いレベルに達しているんです。現場の旧来の一次産業レベルで考える概念では問題あるので、産業のもっとグローバルな考え方を導入すると、水産業はむしろ発展していると思っているんですが、そもそも理科系の人たちとはそこにずれがあるんです。

昔、下駄屋さん、鍛冶屋さんとか、呉服屋さんというのがありましたが、いまはないですね。そういうかたちで水産業がなくなると思う人が多いのです。それはやはり誤解で、産業の再編の現状を知らないできてしまっている人が多い。

農業センサスとか漁業センサスとかありますが、漁業センサスでいう漁業就業者、漁民の概念というのは、海上作業年間 30 日以上営む者なんです。海の上に行って真っ黒になって仕事をしていないと漁民にはならないです。間違ってもマルハとか日本水産とかいう会社の社長は漁業就業者にはならない。60 年前の定義ですから、その時代にはそれなりに意味があったんですけれども、いまは水産業の従事者はもっと考えないといけない。だから、水産業なんてもういいんじゃないっていわれるのです。

うちの教官や学生にも二通りあるんです。水産業がなくなったら、水産学部は必要ないだろうと私たちは思っているんです。水産業がなくなったら、水産学部は成立しない。ところが、水産業はなくなっても水産学・学問は違う、そういうふうにいう人はかなり多いんです。業は関係ない、学問だから(笑)。この地球上から水産業がなくなっても水産学部というのか。そこにかなりズレがあります。後者は、宮澤先生のいわれるように、アイデンティティを見失っていく自信なさを象徴している勢力だな、と思います。

個々の学問分野を見ると、おれは魚を対象にしているだけとか、おれは動物のたんぱくの構成をやっているだけで、函館にある産業とのかかわりなんて考えたことがない、という人がかなり多いです。

姉崎　学部の名称の変更というのは、後者の人たちの議論だということですね。

廣吉　そうです。名称の変更の議論は必要だと思いますけれど、根底的な議論をまだしていません。おれは理系と工学系の研究者と何も変わりはない、と堂々という研究者と、僕らのように、何をいっているんだ、実学にこそ科学はあるのだ、と思い込んでやるのと、基本的認識が違ってきていて、その差は埋められなくなってきている。農学部もそうですが、どうしようもない状況があって、大論争をする必要がある。

いまいった議論は、昔からあるんです。分かりやすくいえば、水産の分野は戦前の旧帝大系にもありましたし、函館高等水産やいまの東京水産大学のよ

うに農林省の講習所にもありました。純粋科学系と実学グループの両方があったんです。同じ水産学部でも、東京大学にも京都大学にも帝大時代から水産学科のようなものがあった。もちろん農学部でもそうです。そこは体系化されているわけではなくて、たまたま 4 講座、5 講座あって、生物系と植物の系があったり、水産の化学、それくらいしかないけれど水産学科という所帯をもっていました。ところが、うちの学部とか、東京水産大学とか下関の大学のように、総合的になんでも実学系からスタートして、さきほど申し上げた旧漁撈、増殖、製造の 3 本柱がそろうわけです。

科学と技術に分けることはできますが、実学からスタートして総合化していったところと、あとつまみ食い的に講座をつくって整えていったところという差異があります。後者の帝大系はほとんどいま崩壊してしまっています。うちはまだ残っていますけれど（笑）。崩壊して、農・水・林と合わせて生命系といったりして、実学系を失うのは時間がかからなかったんです。いまここに水産学の根を求めることはできない。水産学会という学会が理科系でありますけれど、中をみれば後者の勢力が席巻してきている。

僕らは産業系だから、産業技術の体系を生産手段の体系だとか実態との関係で技術や教育・研究の体系を客観的に分析しようという、技術論の視点で見る分野がありますけれど、日本の産業構造の再編が今日に至って教育分野に非常に明確に出てきた感じがしますね。うちのような実学から展開してきた学科が実態を失いつつある、看板を下げなければいけない状態にきていると思います。

光本　全部の研究者の方にどういう貢献ができるかということを出してもらって、将来構想委員会の中で議論するということを研究科長はおっしゃっておられましたが。その議論が本質的な議論につながるんでしょうか。

廣吉　つながればいいなとは思いますが、僕自身は、いまの技術的な視点は、看板を下げるべきじゃないと思っている教官の一人ですが、そういう視点で見れば、多勢に無勢でしょうがない。

現状から見ると 2 系必要だと思っています。一つは基礎学系および総合系。水産学のアイデンティティを失いながら、自分の学問技能の身の置きどころ、研究教育のベースを変えていこうという中におかれている人たち。それから、われわれのように、旧実学系の看板を背負ながら、産業的な再編成の展開の中にこそ研究があるという方面、両方必要だと思います。

学問の体系として裾野がどんどん広がり、工学や理学も広がり、垣根がなくなり、そういう領域は認められるわけです。それと併せて、産業は固有の存在ですから、そちらへのシフトを強めていけば、もう一つ違う山が出てくるわけですけれども、それがなかなか見えてこない。

宮澤　全学教育、1・2 年生の教育に、水産学部は離れているからほとんど貢献していない。それに貢献を要請されていて、また独法化を前にいま建物が建っていますね。そこの共同利用スペースを 20%出せという学内内規があるので、それを使ってスペースの何とか確保するから、札幌に何名か出しなさいと。何名か出すということになるとポストを吸い上げるというかたちになりますから、いままでの組織の形態のままでは維持できないから再編なんだというのが、5 月の教授会での学科再編の正式な理由です。

姉崎　研究科長のお話では、水産学という概念を「科学」をつけることでバージョンアップして全体を捉えようということでした。

廣吉　学と業の違いですね。自然科学系の研究者の代表的な意見の一つだと思います。全体の状況を映し出していると思います。

日本の国民経済が選択している産業構造なり国民経済の序列において、農とか水とか林がここまで台無しにされているから、学生に説明できない。天の恵みとか、命とか、地球環境だとかの価値を説明してみても、ずっと教育体系の中でそう教えられてきていないわけです。漁民や農民は尊い聖人である、神聖な職業であるという教えはないでしょう（笑）。初等・中等教育の中で。突然ここへ来て産業的な価

値について語り出すと、とたんに違和感をおぼえますね。これは困ったものです。これは、大変難しいことになったなと私は思っています。増殖系のところが水産学部でもやや人気が高くてそれ以外は低いとか、いまはバイオが沸いているから学生の希望が多くて、漁撈系が少なくなってきたとか、そんなことをとやかくいうのがおかしいといってもなかなか難しいです。

姉崎　私は名古屋にいて、あそこの農学部は完全に第二理学部で、農学という点ではかなり弱いと思いますが、その傾向は前からありますよね。

廣吉　一般論ですけれども、帝大系にある農学部のポジションがそうだったということがありますよね。

私の経験ですが、東大の田無農場へ見物に行ったんです。「農学実習Ⅰ」なんていう1単位の科目で、さつまいも掘ったりして農学実習なんていわないでほしいですね。あれには参りました。実学になるととたんに弱くなってしまうんです。トラクターに10秒くらい乗ってみて、次、とかいって。そういうレベルです。それでは農学の部分を失ってしまう。北海道にあれば、勉強の対象にしていける学部としてきちんと位置づけて、もっとグローバルなスケールで再構成したいと思います。ちょっと難しいですけれどもね。

光本　水産学で実習というのであれば、広い意味で漁民の近くに学生が行くことが大事ではないかと思いますが、そういうことは何かされていますか。

廣吉　学科によってはあります。海洋水産システム学科の実習はもちろん十分ではないがそういう姿勢です。実験場がありますので、そこを中心にして、周辺に行って水遊びしてきたり。その程度ですけれど。

現場の実習は昔と違ってやれなくなってきています。農業も酪農も同じだと思います。預かっている子どもたちが病気をしたり怪我をしたりしたらどうするか、それを考えてしまいます。むやみやたらなことはできないです。非常に難しくなってきている。工夫が必要になってきている。北大全体がそういう手立てを考えるシステムができないといけないのですが、協力態勢も難しいです。

ただ、ご承知のように、体験漁業・体験農業のような、現場と接点をもつような都市と農村との混住化とか垣根がなくなる、交流だとか、戯画化されたかたちでしかないですが、だんだんそういうかたちはできています。だから、実験室的な話は工夫はしなければいけないと思います。

地域における学生の活動

上田理　水産学部が道あるいは国全体の水産の方に目を向けているというのは分かるんですが、学生たちはどうなんでしょうか。函館市というところへ目を向けながら自分たちの学生生活を送っていきたいと思っているのか。札幌の北大の本校、札幌キャンパスの方に目が向いているのか。それとも、まじめに勉強していてそのあと、全国的なことを考えているのか。他の大学をうかがっていると何となくでも学生さんの動きというのが感じられるのですが、先ほどの研究科長のお話でも、研究と北大というのは分かるのですが、学生の姿については聞こえてきませんでした。

廣吉　例えば、就職先としては、もはやそういう状況、実学の部分とつながるようなところは少ないです。ただ、それでも他の学部よりは、まだつながりはありますし、業界あるいは事業所レベルでそういうところへ行く学生は他の学部よりは多いと思います。

上田理　例えば、課外活動で、水産の勉強をしている。近くに港がある。そういうところへ自分たちで行って、2年間で町おこしの方に学生がかかわるといったことなどは。

廣吉　未来大はそれを志向しているけれども、うちはないです。

サンプル採集などで、あるいは実習場・実験場として函館や道南とのつながりではあります。現場でお世話になったり。でも、将来の自分の仕事として、地域とのつながりを見ていこうという学生はいないと思います。個人的にはありますよ。墓をつくるくらいに函館が好きだというのは、2年か3年に1人くらいはいます。函館以外は就職はいやだ、とか。

宮澤　出身地が函館だったりしてね。

廣吉　よく聞いてみれば（笑）。

宮澤　学生の就職先ということでは、一般的に函館に、あるいは地元志向ということはありません。研究テーマで、お金がないので、サンプリングの場所がたまたま周辺で、地元の漁業者にお世話になることはあります。だけど、地域研究をちゃんとやっているということではなくて、材料として実験をやっている。それを地元に還元するということではなく、かなり遊離したケースが多いのではないでしょうか。

フィールドワークでやっているケースももちろん

ありますよ。例えば、噴火湾周辺と資源研究とかで貢献はしています。しかし、学生が自分たちの主体的な地域研究グループみたいなものをつくって、そこにいろいろな課題を、というのはないです。函館の周辺でもいろんな問題があるのです。山ほどある。矢臼別の川でイトウが砂防ダムをつくるので捕れなくなるというのと同じような問題がある。

そういう問題に目を向けて、例えば、道内で心臓病の患者が非常に多いのは、函館周辺でしかも漁村地域に集中している。特定の漁村に突出して多い。なぜ、心臓病の患者が多いのか。それは出稼ぎの関係なんです。しかし道内全般出稼ぎ。漁村から出稼ぎに行くのは、みなやっているじゃないか。なぜ心臓病の患者が出稼ぎする特定の漁村にあるのか。けっこう医者の中では問題になっている。問題の根源を解決しようとしたら、対症療法ではなくて、そこまでさかのぼって考えている。そういう問題がたくさんあるんですが、そういうところへ目を向けてとりくもうという学生がいるとか、そういうことは聞いたことがないです。

廣吉　現場にサンプルなり研究の対象があるから、ここに目を向けている者は少なくないんです。われわれもそうです。そういう関係で論文のテーマとか実験の場所を選ぶ。それから、とくにうちには本当にこよなく北海道が好きで選んできたという学生は多いです。

宮澤　昔はもう少しいましたけれどね。

廣吉　景気のいい頃はそれなりに、市役所にも OB がいましたけれどね（笑）。

姉崎　それは、学生の人生トラックの中で、やがてここを出るというふうに考えていて、ここは仮の宿という認識があって、それが地域に対するかかわり方を希薄にしている。研究それ自身がグローバルな普遍的なものを扱うということもありますが、そういう要素はありますか。

廣吉　それはありますが、ここに北洋の基地があり、函館どっくがあったり、水産が産業構造の中で占めていた地位が高かったころは就職先として選択されただろうと思います。しかし、函館の大学という感じはないですね。高等水産は全国にここしかなかった。ですから全国から集まってきた。

宮澤　いまも全国から集まる傾向は続いていますか。

廣吉　続いています。他の水産も同じです。下関の農林水産省の大学校も同じですし、東京水産大学は少し性格が変わりました。鹿児島は少し違うかな。

宮澤　五十歩百歩でしょうね。

染木　函館の街づくりの会に顔を出したときに、水産学部の学生に何人かお会いしたのですが、大学として、学部として奨励していることはありますか。NPO があるよとか、街づくりの会があるから参加してみたらどうか、ということは。

廣吉　個々の学生にはけっこうあります。逆に、函館市が学部学生を表彰する制度があります。

宮澤　個々の教官が窓口的にというのはあるかもしれません。

廣吉　学科として組織として、つながりをもってはいません。

光本　函館市は何を表彰するのですか、成績ですか。

廣吉　優秀な学生に対する函館賞です。

光本　学業成績がいいと函館市が表彰するんですか。何か変な感じがしますけれど。

廣吉　卒業証書といっしょに、推薦された学生に賞状か何かが渡されます。

宮澤　不思議な話ですね（笑）。

廣吉　それから、留学生に対しては、市から奨学金があります。毎月 1 万円の助成があります。水産というこだわりがあるわけではないです。

宮澤　学生のグループが自主的に出るという類のことはどこでもありうる話ですが、学部として NPO を育成しようとか紹介するということはないと思います。

地域産業構造の科学的分析

廣吉　僕らはたまたまここにいますので、実験、経験フィールドとして、当然、檜山、渡島とか、市内の珍味加工業界だとか、卸売市場のネットワークを調査や研究したりするので、人的なつながりをもってくることは多いですけれどね。学部が貢献しているという感じになっていることはないです。

しかし、ここの移転問題が出るたびに反対声明が挙がるんです。反対声明のための組織がある。ここは港町の中にありますので、港町内会から反対声明が挙がる。食堂はここのお世話になっているので、ここが干上がってしまうとかね。

宮澤　アパートや風呂屋の経営者もですね。

廣吉　経済のつながりは、深いのだと。そうかと思った。

それから、これは僕らの責任ですが、「国際都市」「水産都市」といいますが、函館市自身がどんな街なのかということを、経済・社会的なポジションの

現状分析をしたものがないんです。なぜ、「国際都市」「国際港湾」というのか。ただ語っているだけで、その可能性や現状分析については全くない。産業分析なり、地域社会の分析、ここがおかれた函館市がどういう特徴・特性や可能性があるのかをちゃんと分析したものがない。市自身も理事者も調査を客観的にやっている形跡が全くない。昭和 40 年代にはあります。もし必要でしたら是非見てほしい。函館日銀の分析したものだったと思います。

新幹線を通すといっていたが、海峡線が通ってからどんどん人が減っています。函館駅・五稜郭駅もそうです。なぜそうなったのか、どういう動線がどうなったのか。物流の構造がどうなったのかは、あまり分析されていない。駅をつくってみてどうするのか。「摩周丸」の二の舞で赤字をつくるだけではないか。

大きく産業構造が変わったのに、何が「国際都市」なのかというのも分かっていない。港湾の性格分析もされていない。函館どっくは 20 万トンドックヤードをつくって一度倒産しました。ローカル都市のドックの需要はどうなのかの分析はないです。観光都市といいますが、ここの観光資源は何なのか。500 万人の入り込み客は都市経済にどんな意味があるのか。そんなに市民に対して波及効果があるのか。

市民から見て観光の街の産業がどう見えるのか、市の圏域では高齢化とドーナツ現象が進んでいますが、市民から見ると観光の街がどう見えるのか分析されていません。函館の朝市なんてのは庶民がまったく寄りつかない。「自由市場」もあやしい。理事者は、観光バスがどかどかと来て、と自慢するが。
分析すべきです。未来大の人はきちんと分析してほしいと思う。

姉崎　そういう分野は研究するようなものはないのですか？

廣吉　われわれの分野はそうなんですけれどね、人手不足でそれはないです。

姉崎　教育大や函館大にはそういう人はいないのですか？

廣吉　「未来論」や「新自由主義」的な立場からハウツーをいう人はいると思います。

姉崎　大学が持つ地域経済効果は、もっと重層的ですよね。釧路のときも、釧路の教育大の学生と教員の支払いが 10 億円で、文部科学省から 10 億円で 20 億円。それがやはり大きく影響している。それだけではなく、それ以外の波及効果があったりして、それをまわりが強調すればするほど、大学人の方は冷めていく。そんなことで評価されたくない。もっと研究内容の面で、地元から評価されたいと。そういわないとやはり本当の意味で残れないということはいわれたのです。逆にここにくると、北大の場合は研究をやっているので、周りで情緒的なことをいわれても関係ないと。一方で相当溝があると外から見ると感じますよね。

廣吉　地元のニーズや理事者に寄り添っていかなければならないという側面が強まっているんですが。

姉崎　一方はラブコールをするが、一方ではそんなことをいわれても困る。本当の意味での大学がそこに存続する意味、地域社会との関係性というのは、そういうことを話す場というのはあまりないですか。

廣吉　教員を巻き込んだ組織的なものはないです。市政とわれわれとの間にシンクタンク的な調整的な機構があるといいなと思います。

宮澤　創成機構も上がつくった一種のアドバルーンですよね。一応絵を描いたわけです。

廣吉　市長や議員や市の業界の有力者との間では時々意見交換の場はあるようです。

光本　市長・議員の任期は 4 年、長く持ってもせいぜい 2 期・3 期で終わる、しかし、大学は何十年もそこにある。地域の人々もなおそこに住み続ける。函館という都市は依然としてそこにあるわけですから、長期的なビジョン、構造・問題とか課題の分析というかたちでの大学と地域社会との結びつき、知的な役割というものは、市長がどういったとか、議員がどういったとかいうことにとらわれない根本的な役割ですね。

廣吉　政治家は政治家で言い分があることは承知しているのですが、客観性も根拠も乏しい状態にわれわれも踊るわけにはいかない。

光本　たまにはいっしょに踊ることも（笑）。

廣吉　もちろん（笑）。大学院重点化は個人的には反対でした。重点化して、ますますギャップは大きくなった。定員を何とかしろというわけにはいかない。学問研究はむろんのこと地域貢献というテーマについても、何を考えているのかといいたいです。

宮澤　理科系の教育を受けてきて、理科系の科目で受験を受けてきて、理科系の専門科目をずっとやっている中で、なぜ社会科系の教室が一つだけあって大学院生が育ちますか。当然のことでしょう。幅広く水産業、自然科学の問題も含めて、地域貢献とは何なのかという議論がなければいけないです。

部分的にはコミットすることはありうるし、それぞれが少なからず地域から頼まれて何かやってやったりとか、細かいことはあると思います。にぎにぎしいのではなく、地元の中小企業家同友会が昆布研究会をずっとやっていたのをうちの先生がコミットしてサジェスチョンしたり、交流をもったりすることの方がよっぽど大事で、地道で具体的な成果を挙げている､そういうケースがあることは認めつつも、産業系の実学系の大学だというからには、研究の分野でも社会科学の部分が基礎となっている両輪の一つの輪としてあっていいのではないかというのがずっとあるわけです。

そういう発想が、例えば、学部全体の再構成を考える、大学院の重点化を考えるときに、ちゃんと考えて組織再編をする。そういうレベルで抜本的な議論を怠ってきたと感じますね。

光本　長い時間どうもありがとうございました。